

「たちまち重い皮膚病は去りその人は清くなった」

今日の福音も先週に引き続き、マルコ福音書の最初の個所つまり、イエスのガリラヤにおける宣教活動の一コマをきわめてリアルに描いております。

しかも、今日の場面は、当時も大変恐れられていた重い皮膚病が、まさに奇跡的にイエスによって癒されたと言う出来事であります。そもそも、この奇跡物語は、おそらくユダヤ教の律法や、祭司を重んじていたユダヤ人キリスト教徒たちによって語り継がれていたようです。

とにかく、今日の舞台からも、イエスの活動には、必ず病気のいやしが伴っていたことを、裏付けることができるのであります。

そこで、奇跡物語の構成に従って、まず、病人と奇跡行為者との出会いと、いやしの懇願で始まります。

「そのとき、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い。

『御心ならば、わたしを清くすることがおできになります。』と、あくまでもいやし主<sup>ぬし</sup>で

あるイエスを、中心にして自分は、控え目に全面的にイエスに信頼していることを強調しています。ですから、他の場面ではほとんど使われていない、「御心ならば」と、徹底してイエスの思いを大切にしています。したがって、「お望みになるだけで、わたしを清くすることがおできになります。」（フランシスコ訳）とも、訳すことができます。

そこで、イエスの心の動きを、独特な表現で表します。つまり、「深く憐れんで」という言い回しですが、福音書では、イエスと父なる神に対してのみ使われる言葉であります。その語源には体の内臓をさす言葉があります。それは、まさに最も深く激しい衝動が納められているところで、情念的愛と激しい憎しみの両方が生まれる中心部分にほかなりません。

ですから、福音書がイエスのあわれみについて語るとき、それは、イエスがはらわたの底から感動した、何か深く神秘的な感情を表現しているのであります。

とにかく、今日の場面でも、イエスは、この惨めな病人に対してとても深い憐れみを抱かれたのであります。ですから、早速手をさしのべて、その人にさわり、「**そうしてあげよう。清くなれ**」と宣言なさったのであります。

ちなみに、40 節の「**重い皮膚病**」ですが、20 年以上前までは、「**らい病**」という言葉を使っていました。

しかしながら、1996 年に「**らい予防法**」が廃止されてからは、差別用語にもなってしまって「**らい病**」という言葉は、使うべきでないという経緯があります。旧約から、イエスの時代にまで続いていたこの病気に対する偏見と差別は、医学の進歩のおかげでそれまでの患者さんたちの人権をも無視するような対応の仕方の抜本的な改革が、やっと 20 年前に実現したという悲しい歴史を、わたしたちも背負っているのではないのでしょうか。

30 年ほど前に、宮城県のある小教区を、たった一年でしたが担当したことがあります。そこには、国立のハンセン病療養所があります。広大な敷地の小高い丘の上には綺麗な聖堂があります。患者さんで、そこまで歩いて来られる方たちは、日曜日の早朝 5 時に三々五々ミサをささげるために集まって来られます。とにかく、皮膚呼吸が殆どできないので、特に夏の暑さは大変で、そうして朝の涼しいうちにミサをささげるためなのです。けれども、長年にわたる闘病生活と人権をも無視されるような苦しい日々を耐え抜くことできるのは、信仰以外に何も無いと言う熱心さが、聖堂にみなぎっていたのを、今でもその感動を忘れてはいません。

そこで、聖堂まで来ることが出来ない患者さんたちには、かく部屋を巡りながら聖体をささげておりましたが、その拝領すらできない重病の方もおられました。そのような方には、短いお祈りをささげるしかできませんでしたが、或る日曜日に、60 代の女性の信者さんでしたが、突然「神父さん。みことばをください。」と願い出たのであります。その方は、イエスのいやしのわざは、秘跡をとおしてだけでなく、みことばによっても実現することを信じていたのではないのでしょうか。とにかく、そのリクエストをもらってから、早速その日のミサの説教を録音して、そのテープをその方の容体のいい時に聞くことができるようにいたしました。また、聞き終わったテープは、他の信者さんにも渡してもらおうようにしたことが、わたくしの貴重な司牧経験となりました。

ちなみに、カトリック教会が大切にしている七つの秘跡の中に、「**病者の塗油**」というまさに癒しのための秘跡があります。

この秘跡で、司祭はまず次のような導入の言葉をのべます。

「皆さん、主イエス・キリストは病気の人、苦しむ人に特別のいつくしみを示し、いやしと慰めを与えてくださいました。主の名によって集まったわたしたちの間に今、主イエスがおられ、使徒ヤコブをとおしてこう教えておられます。『あなたがたの中で病気の方は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。

信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせて下さいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦して下さいます。』（ヤコブ 5. 14-15）この病者の秘跡を受けるわたしたちの兄弟・姉妹を主イエスの恵みと力にゆだね、救いと力添えが与えられるよう祈り求めましょう。」

その後、回心の祈り、聖書朗読、さらに連願が続きます。

そして、いよいよ病者の油を塗る場面になります。司祭は、病人の額と両手に、次のように祈りながら、油を塗ります。

「この聖なる塗油により  
いつくしみ深い主・キリストが  
聖霊の恵みであなたを助け、  
罪から解放して  
あなたを救い、起き上がらせて下さいますように。  
アーメン

続いて、次のような祈りが続きます。

「神の子イエス・キリスト、  
あなたは人間を救い、病人をいやすために すすんで人となり、  
苦しみを受けられました。  
心とからだの健康を願うこの病人を顧みてください。  
あなたの名において聖なる塗油を受けた者が支えと慰めを得て、  
力をふるい悪を退け（あなたとともに苦しみに耐え）ることができますように。

以前、岩手県の県立病院に入院しておられた結核の患者さんでしたが、容体が悪化したとの知らせを受け、早速、その病院に駆けつけ、この病者の塗油を受けました。その後、幸いにして持ち直し、そのピンチをみごと乗り越えられたのを、看護師たちが目の当たりにし、その秘跡の力に驚いていました。

今も、癒し主イエスは、病める人、苦しむ人を力づけ勇気と希望を与えてくださっていることを、信じ、主とともに、心と体の病に苦しんでいる方々に少しでも奉仕ができるよう共に祈りたいと思います。